
近くて、遠くで・・・

山菜歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

近くて、遠くで・・・

【Nコード】

N1432H

【作者名】

山菜歩

【あらすじ】

ひとつ屋根の下で暮らす男女。恋人同士ではない、ましてや夫婦でもない。奇妙な関係。でも、お互いに徐々に惹かれあっていったが・・・。ふたつでひとつの物語をお届けいたします・・・。

01:「Her Side」(前書き)

少々ネガティブ風味ですので、そう言うものが苦手な方は閲覧注意
願います。

01: Her Side

.....

お互いに無言の時間が流れる。

私と彼は、隣り合ってリビングのソファに座っていた。

ぼーん.....

柱時計が、重々しい音を10回立てて時刻を告げる。
夜の、10時。

おおおおおお.....ん

時刻を告げた余韻を残して、再び訪れる静寂.....。

* * * * *
* * * * *

私と彼は、ひとつ屋根の下で暮らしている。
でも、恋仲ではない。

私はまだ、彼に名前と呼ばれたことがない。
そして私も、彼を名前と呼んだ事がない。
キスをしたことも、身体を交えたこともない。
奇妙な関係。

.....否、私はこの人に思いを寄せている。
ただ、それだけの間柄。

”・・・”

私は黙って、彼に寄り添った。

そっと、肩に頭をもたせかけ、目を閉じる。

微かに聞こえる鼓動に、耳を澄ませる。

彼は、そんな私を拒むことも、抱き寄せることもしない。

この時間が、私はとても残念で、とても愛しかった。

「どうしましたか？」

気が付いたように、彼が私に声をかける。

”・・・いいえ”

私は答える。

「お疲れなのでしたら、もうお休みになられた方がいいでしょう」

”・・・そうですね。そういたしますわ”

「おやすみなさい。良い夢を」

”はい。おやすみなさい・・・”

いつもの光景。

* * * * *
* * * * *

彼は一人ぼっちで、でも寂しがりやで、傷つきやすくて、強がりやで、不器用で、とても優しい人。

そして、世捨て人だった。

初めて会った時、何もかも見透かしたような瞳が、とても怖かった。言うなれば、ずっと先に訪れるはずの「死」を、すでに見つめてい

るような遠い目をしていた。

感情の現れない、マスクラのような表情。

人に敵意を向けることも、ましてや自分が受けた傷をさらけ出すこともしない。

何もかもひとりで背負い込もうとする。

そして

自分の一挙一動で、相手を傷つけることに、極度の恐れを感じているようだった。

それ故、何も信じない。信じることができない。

歪んだ強さと、優しさの持ち主。

でも、いつの頃からか。

もう覚えていないが、私は不気味に感じていた彼の側にいるようになった。

動機は単純な想いからだった。

”強くて、とても脆い彼を、放っておけない”

彼と何度か接しているうちに、危なっかしくて、目を離したら怪我をしそうな危うさを彼は持っていることに、私は気づいていた。

最初は構えていた彼だったが、少しは私を信頼してくれたのだろうか。

彼は私と生活を共にすることを提案した。

でも、惹かれつつも、私は彼とうまく接することができずにいた。

腫れ物を触るような、よそよそしい言動しかできなかつた。

時折私に向けられる彼の優しさが、怖かつた。

それ故、自分の気持ちを口にしたことは、一度もない。

近くて遠くから、そっと見つめている。

こんなに近くににいるのに、私に心を開いてくれない。
もどかしさで気が狂いそうになったことも、何度もある。

あれから数年か……。

私は苦笑し、目を閉じた。

* * * * *
* * * * *

「全てを捨てて、私は孤独な終焉を迎えるつもりです」
彼はぽつりと、そんな事を漏らした。

ラジオから流れてきた音楽が発端だった。

” そんな事おっしゃらないで下さい ”

私は苦笑しながら返す。

でも、彼は

「『人知れず、この世からいなくなる事』これが私の望みであり、
願いなんです」

そう言つて、少し寂しそうに微笑んだ。

” そんな…… ”

私は更に苦笑する。

「では、あなたの願いは、何なのですか……?」
” それは…… ”

* * * * *
* * * * *

出会った当初の夢を見た。
懐かしく思ったと同時に、何か嫌な予感が胸を掠めた。

* * * * *
* * * * *

ある日のことだった。
それは唐突に起こった。

「ここであなたとはお別れかもしれませんが」
突然のことに、私は声を失った。

旅に出る。

突然言いだしたのが始まりだった。
連日見る夢……。
彼が意図している事はすぐに理解できた。

私は平静を装い、彼に聞いた。
”私も、ご一緒してもよろしいでしょうか？”

私の問いに、彼は首を左右に降った。

今まさに彼は「願い」を叶えようとしているのだ。
彼がしようとしている事は、地の果てまで行って、自ら命を絶つつもりでいる事。

連日の夢と、事実安易に予想できた。

私の中で、何かが弾けた。

” わた・・・は・・・で・・・ら・・・ ”
「・・・？」

彼は足を止める。

私はそんな彼の背中にしがみついた。

” あなたを必要としている者は、あなたの目の前にいます ”

もう、止められなかった。

数年分の、閉じ込めていた想いが、一気に溢れだしてくる。

” お願いですから ”

” 死んでしまいたいほど苦しいのなら、悲鳴をあげて下さい ”

涙が、こぼれる。

” 弱気なことを言っ て笑う者など、ここにはいません ”

彼の表情は、困惑の度合いを強めた。

しかしその表情には、怯えが混じっていた。

「私は・・・そんな事・・・っ」

私を強引に離し、トランクを手にした。

私はそれでも彼の後を追う。

” もう二度と会えないのでしたら！ ”

彼の足が止まる。

” 一度だけでもいいですから・・・ ”

” これつきりでいいですから・・・ ”

” お願いです・・・私を名前で呼んで下さい・・・・・・・・・・”

”これが私の、一番の願いなのです・・・”
彼は目を見開く。

しゃくりあげる私に、彼は困ったような微笑みを浮かべただけだった。

大好きな表情のはずなのに、今は見ているととても苦しい。
嗚咽が激しさを増し、息が詰まりそうになる。

だが、次の瞬間。

私は温かさに包まれた。
顔を上げると、彼の腕の中にいた。

彼は、強く強く私を抱きしめた。

「*****さん・・・」

一瞬だけ見せた、彼の激情。

愛しさと、悲しさと、嬉しさと、申し訳なさと、様々な感情が混ざり合った表情をしていた。

私は彼の胸に顔を埋める。
よりはつきり聞こえてくる鼓動。

「ごめんなさい。私は*****さんの気持ちを知っていたのに・・・
こんな事を・・・」

しばらく、私達は抱き合っていた。

時計の針がひと目盛り動いて・・・

彼は私を解放した。
私もそつと彼から離れた。

”もう、行ってしまわれるのですか？”
私は聞いた。

もう、充分だ。私の願いは成就された。

だが、彼は首を横に降った。

私は驚き、落ち着いてからこう訊いた。

”これからも、私をあなたの側に置いて下さいますか？”

私の問いに、彼は微笑む。

「あなたと私が出会ってから、今まで過ごしてきた時間が答えです
そして、改めて

「私の 側に いてください」

私は涙を拭おうとして・・・彼の指が涙を拭った。
そして、私ははつきりと肯いたのだった。

* * * * *
* * * * *

数年後。

”あの時のこと、覚えていらっしやいますか？”

「あの時・・・ですか？」

”あなたが旅に出るとおっしゃった時のことです”

「ああ、ははは……。すみません」

”いいえ。私、あなたがいなくなっても、探し当てる自信はありましたけどね”

「ははは……。***さんにはかないませんね」

彼は苦笑する。

でも、あの時とは違って、心の底からの笑顔だった。

私はそつと彼に寄り添った。

そつと、肩に頭をもたせかけ、目を閉じる。

あの時と同じように、微かに聞こえる鼓動に、耳を澄ませる。

彼は、そんな私の頭をそつと抱き寄せた。

f i n . . .

01:「Her Side」(後書き)

「近くて、遠くで・・・」Her Side」
最後までお読み頂き、誠にありがとうございます。

*この段階で、まだお話は半分しか進んでいません。
話の展開がかなり急だったと思われませんが、「彼」目線でのエピソードで全て補完させます。

02:「His Side」(前書き)

ネガティブ風味があるので、そういう話が苦手な方は、**閲覧注意**願います

02: [His Side]

今夜も訪れる、静寂の刻。

一緒にソファに座っている彼女との会話が途切れ、リビングがしんと静まり返る。

ぼーん・・・

聞きなれた柱時計の音が、現在の時刻を告げる。
もう夜の10時か・・・。

ふと、肩に何かが当たった。

彼女の頭だ。

・・・眠いのだろうか？ 疲れているのだろうか？

* * * * *
* * * * *

私と彼女は、ひとつ屋根の下で暮らしている。

でも、恋仲という訳ではない。

我ながら奇妙な関係だと思う。

でも、自分の心情に変化が現れてきた。

私はとても不器用な人間だ。

彼女は何故か私の側にいてくれ、あまり細かい所に気の回らない私に変わって、身の回りの世話をしてくれている。

本当に、不思議な女性だ。

こんな人間に接しようとするなんて・・・。

”・・・どうかなさいましたか？”

迷った拳句、私は彼女に声をかける。

「・・・いいえ」

”お疲れなのでしたら、もうお休みになられた方がいいでしょう”

「・・・そうですね。そういたしますわ」

”おやすみなさい。良い夢を”

「はい。おやすみなさい・・・」

彼女は、少し残念そうにしていた。

いつもの光景。

* * * * *
* * * * *

私の人物像を簡単に言ってしまうえば、「人間不信」「嫌世感の塊」
のふたつで片付く。

現に、既にもう「死」を見据えている。

ポーカーフェイスのせいで、思考が読めないらしく、何を考えてる
のかわからないらしい。

そのおかげで、カードは負けたことがないのが唯一の自慢だったり
もするのだが・・・。

孤独を愛するが、何故か寂しがりやでもある。

これは彼女を住まわせたひとつの理由でもある。

「他人を巻き込みたくない」と言う思いから・・・

いや、「他人に頼った所で何になる」という思いがあって、他人に
頼る事もしない。

そして、
一番恐れているのは、「自分の言動で他人を傷つけてしまう」事だ
った。

一度、私の仕打ちが原因で、昔の恋人を失ったことがあった。
それから、「自分の一挙一動で相手を傷つけてしまうのではないか」
という恐れに付きまとわれるようになった。
だから、私は他人も自分も信じることができない。
矛盾した思考に苦しさを感じると共に、この苦しさが私をこの世か
ら解放してくれるのではないかと言う淡い期待を込めていた。

そんな時に、私は「彼女」と出会った。
最初は私に接してきた「彼女」を恐れていたが、私に親身になっ
てくれる彼女に徐々に心を開くようになった。

・・・正直に言おう。
私は、彼女を愛している。

「一緒に住みませんか？」
私の提案に、彼女は驚きつつも承諾してくれたのだった。
だが、生まれつきの不器用さを本領発揮。彼女の心情がつかめず、
また好意をうまく伝えられずに日々悩んでいる。
彼女もまた困惑しているようで、表情が曇ることが度々あった。

そして、現在に至る。

* * * * *
* * * * *

そっと彼女の寝室に入る。

彼女の寝顔は本当に可愛らしい。
そつと、頬に触れる。

何度これを繰り返しただろう。
ここから先に踏み出す勇気が、私にはない。

* * * * *
* * * * *

「全てを捨てて、私は孤独な終焉を迎えるつもりです」
私ははぼつりと、そんな事を漏らした。

ラジオから流れてきた音楽が発端だった。

一瞬「しまった」と思ったが

”そんな事おつしやらないで下さい”

彼女は苦笑しながら返す。

どうやら冗談だと思ってくれたらしい。

ホツとしつつも、私は抱えている苦しさをとどめておく事ができな
かった。

「人知れず、この世からいなくなる事」これが私の望みであり、
願いなんです」

まただ。またあの時と同じだ。

昔の恋人の時と一緒にだ。

”そんな・・・”

彼女は更に苦笑する。

取り繕うように、私は彼女に聞いた。

”では、あなたの願いは、何なのですか・・・?”

「それは・・・」

* * * * *
* * * * *

深夜。

寢室兼書齋で読書をしていた時、唐突に頭を掠めた。
彼女と出会って間もない時の事だった。

あの時見せた彼女の表情が、昔の恋人の浮かべた表情と酷似していた。
眠っていたはずの苦しさが、ぶり返してきた。

それも、何倍にも膨れ上がって。

* * * * *
* * * * *

ある日の事。

苦しさが臨界点を突破した。

これ以上、こんな苦しさに縛られるのは嫌だった。
もう、疲れた。

”ここであなたとはお別れかもしれません”

突然のことに、彼女は驚きの表情を浮かべた
旅に出ると、突然言い出したのだから、無理もない事だった。

「私も、ご一緒してもよろしいでしょうか？」

彼女の問いに、私は首を左右に降った。

私は自ら命を絶つつもりでいる。
そんな所を彼女に見られたくなかった。

トランクを持ち上げ、玄関に差しかつたとき。

「わた・・・は・・・で・・・ら・・・」

「・・・？」

彼女の呟きに、私は足を止めた。
瞬間。

彼女は私の背中にしがみついてきた。

「あなたを必要としている者は、あなたの目の前にいます」

え・・・？

「お願いですから、死んでしまいたいほど苦しいのなら、悲鳴をあげてください」

私は振り向いた。

彼女の頬に涙が伝っていた。

「弱気なことを言って笑う者など、ここにはいません」

彼女の表情が、昔の恋人の表情とオーバーラップした。

嫌だ・・・嫌だ・・・見たくない！

”私は・・・そんな事・・・”

私は彼女を離し、トランクを手にした。

彼女はそれでも私の後を追ってきた。

慌ただしい靴音が何よりの証拠だ。

「もう二度と会えないのでしたら！」

私の足が止まる。

「一度だけでもいいですから・・・これっきりでもいいですから・・・」

「お願いです・・・私を名前で呼んで下さい・・・・・・・・・・」

私は息を飲む。

昔の恋人の願いと、同じ事を彼女は言った。

昔の恋人を失った、最大の理由・・・

それは、恋人を名前で呼ばなかった事。

「これが私の、一番の願いなのです・・・」

動揺を抑えながら、私は振り返った。

彼女は号泣していた。

しゃくりあげる彼女を見て、私は困惑した。

でも

こんな人間でも、必要としてくれている。

”あの人と、同じ思いをさせたくない！”

自分でも信じられないほどの、感情の奔流だった。

そして

私は強く、強く、彼女を抱きしめていた。

「*****さん・・・」

彼女の名を呼ぶ事は、私にとって「彼女に一步近づきたい」という願いでもあった。

突然の事に、彼女は驚いていた。

当然だろう。いきなりこんな事をされれば。

でも、彼女は私の胸に顔を埋めてきた。
それが とても 愛しい。

「ごめんなさい。私は***さんの気持ちを知っていたのに・・・
こんな事を・・・」
負の感情を向けてしまった申し訳なさと、私と同じ気持ちだったと
いう嬉しさがないまぜになって、胸が詰まりそうになる。

しばらく、私達は抱き合っていた。

時計の針がひと目盛り動いて・・・

私は彼女を解放した。

彼女もそつと私から離れた。

”もう、行つてしまわれるのですか？”

彼女は聞いた。

殉教者のような、諦めを含んだ穏やかな微笑みだった。

ここまで私を思ってくれている人を、捨てられるわけがない。
捨てられない。

私は首を横に降った。

彼女は驚き、しばらくしてからこう聞いてきた。

「これからも、私をあなたの側に置いて下さいますか？」

彼女の問いに、私は微笑む。

”あなたと私が出会ってから、今まで過ごしてきた時間が、私の答
えです”

そして、改めて

”私の 側に いてください”

私は彼女にお願いした。

彼女の目からは新しい涙がこぼれてくる。

涙を拭おうとして・・・私が彼女の涙を拭った。

彼女は少し驚き、そして、はつきりと肯いたのだった。

* * * * *
* * * * *

数年後

あのときから少しずつだが、本音を小出しにするようになっていった。

時々トンチンカンな事を言ってしまう事もあるが・・・彼女は笑ってくれる。

少しズレているかもしれないが、それでも私は嬉しかった。

ふと、肩に何かが当たった。

彼女の頭だ。

何も考えず、私は彼女の頭をそっと抱き寄せる。

私の、愛しくて大好きな時間。

f i n . . .

02:「His Side」(後書き)

「近くて、遠くて・・・」「His case」
最後までお読み頂き、ありがとうございました。

前回で、「全て補完する」と宣言しましたが・・・。
最大限努力しましたが・・・補完されてます？
ご不明な点がございましたら、コメントして頂ければと思います。

*登場人物設定

彼

31歳・男性。

一人称は「私」

天涯孤独で、率直に言ってしまう(文章中にもあるのですが)人間不信・嫌世感の塊。

プラス、彼女に言わせれば「世捨て人」。

「泉の森」と呼ばれる森の奥深くにある家で、独り暮らしをしていました。

本人は意識していないが、ポーカーフェイス。

その為、カードでは負け知らずという裏設定があります。

(さらに語るのであれば、ノーペアにも関わらずチップを上乗せし、相手を降参させたという設定です)

- ・孤独であることを好むが、寂しがり屋。
- ・「他人に頼っても無駄」という思いから、何もかも自分で背負い

込んでしまっ。

・過去の体験から、「自分の言動で相手を傷つける」と事を極度に恐れている。

このトラウマから、自分も他人も信じることができずにいる。

矛盾した性格、そして歪んだ優しさと強さの持ち主。

そんな自分に接してきた「彼女」を恐れていたが、徐々に心を開いていくようになる。

最初は昔の恋人の面影を「彼女」に見出していたが、だんだん「彼女」として愛するようになっていく。

だが天性の不器用さが災いし、うまく「彼女」の心情を読み取れず、また自分の好意をうまく伝えられずに悩む毎日を送っている。

*彼女(****)

29歳・女性。

一人称は「私」。

たまたま「彼」の家の敷地内に迷い込んだ事から「彼」と知りあった。

面倒見がよく、気配り上手で忍耐強い性格のため、「彼」の身の回りの世話を引き受ける事となる。

事実上、彼と対等な立場にありながらも、彼のメイドに近いポジションにある。

最初は不気味に思っていた(初対面で「彼」を幽霊と間違えたほど)
「彼」だったが、「ある出来事」がきっかけで「彼」に想いを寄せようになる。

「彼」の言動に困惑しながらも、そっと思守りながら一途に「彼」

を想い続けている。

「彼」の微笑んだ顔が大好き。

こんな感じですよ。

女性目線で、独りよがりな男性を慕う感じにしたかったので、少々男性の方の設定を細かくしました。

「女性にそう思わせる男性像って、どんな性格なんだろう？」

考えた結果、このような性格になっていました。

*補足

このお話は、歩の別作品と微妙にかすり程度にリンクしています。さて、何でしょう？w

ヒント：登場人物設定

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1432h/>

近くて、遠くて・・・

2010年10月9日01時48分発行